

## 50 新潟県西洋医学教育の嚆矢 J・P・

## I・VIDALの碑除幕式

清 水 陽 人

二〇〇三年五月十日フランス・アリエージュ県の村マゼールに於いてヴィダールの碑除幕式が挙行されたが、そもそも新潟県の西洋医学教育は明治六年（一八七三年）七月、当時の新潟医学教場で初めて行われた。そこでヴィダールは新潟医学学校校長として三〇人余りの生徒を指導し、月五〇〇人余りの患者の診察に携わった。これが発端となり新潟では県立新潟病院医学所、県立新潟医学学校、県立甲種新潟医学学校、官立新潟医学専門学校、官立新潟医科大学、国立新潟大学医学部となり、現在まで八二四五名の卒業生を出している。

新装なったヴィダール顕彰碑除幕式は日本側から蒲原宏、小林晶両先生と筆者三人が出席、その際日本側から日仏医学会（会長岡島重孝先生）の親書を持参した。

除幕式の前日はヴィダールの生誕地ベレルを訪問した。ベルとエールで美しい空気、夏なら薫風とでも訳せる。十九年前筆者が最初に訪問した時と同じ納屋があるだけだったが、今は六年前から民家となっており、裏の風景は昔と変わらないとのことだが、当時ヴィダール家はサルズイエンヌ、ペロポダイエンヌと言われ今でもその土地の人達が知っている位名譽ある家柄であったように、このベレルに十五ヘクタール、約四万五千坪の土地を所有していたといわれている。生家名はサン・ユベール（聖なる館）と言われ、ここからヴィダール少年は一キロ先のサル・シュア・レルスの教会へ叔父のイポリット・フォーレ神父の教えを受けに通ったとのことだ。しかし若干九才で神学校に編入している。

筆者は既に日仏医学会恒例の「秋の夕べ」で招待講演を行い、当日の除幕式の概要を報告したが、創立五〇周年に当たる日仏医学会の指摘からヴィダールが日仏医学交流史の嚆矢であることも判明した。これについては、ヴィダールの帰路の光景が忘れられない。

新装なったヴィダール顕彰碑除幕式は今年五月一日

フランス・アリエージュ県 (Ariège) トゥルーズの南東六三キロにあるマゼール (Mazères) という小さな美しい村の墓地で挙行された。ここはヴィダール終焉の地でもあり、人口二八〇〇人余り、産業は林業、火花産業、フォア・グラ等だが、パミエ平原とすぐ近くのピレネー山脈の麓で自然豊かな土地でもある。フランス側からはシャルル・セリエ前パストゥール研究所名誉教授、マリ・オ・ルヌー教授、オーギュスト・アルマンゴー氏 (共同研究者)、ルイ・マレットマゼール村長ご夫妻、アンリ・ネルー下院議員、フィリップ・カレジャ医師、ジェラルド・ブルスサル・シユア・レルス村長、ミシエル・ロックジョフル将官、ピエール・セイアン前海軍少将 (ミディピレネー日本協会会長)、ヌゲ医師、モージエ前陸軍大佐 (レジオン・ド・ヌール協会会長) 等である。日仏を問わずこの公式団入場の際は墓のある墓地の一番奥の糸杉まで小学生に日仏両国旗で迎えられ、最初から感極まる思いでヴォルテージは一気に上がったが、シヨパンの葬送行進曲の後日本側による碑除幕が行われ、アロキユション (小スピーチ) と続いた。ヴィダール誕生から

日本出向まで (アルマンゴー氏)、日本での活躍 (蒲原先生)、フランス帰国後マゼール終焉まで (セリエ教授) での後両国の献花が行われた。日本側の献花後は蒲原先生による仏教のお経が読まれたがフランス人には非常に好評を博した。その後君が代とラ・マルセイエーズの国歌が奏でられ、最後はマレット村長の謝辞でつつがなく式は終了した。

午後はロックがあり役場の狭い会場で立錫の余地もない程人が集まりあかたかもフランスの医史学会の一地方会とでもいう形で始まった。大変有意義なものであった。以上今回は顕彰碑除幕式の模様を中心にそのスライドを呈示説明するが加えてやはり行つて初めて分かった刮目に値する驚くべきヴィダールの事実と直面した。これも披瀝したい。

(新潟市)